

引喩と暗喩 (六)

——源氏物語における白氏文集、「琵琶引」など

中 西 進

一 琵琶引—賢木

「琵琶引」(琵琶行ともいう)は白氏文集卷十二(感傷四)がのせる一大詩、自ら「凡六百一十六言」と称し、序をつける雄編である。のみならず、この元和十一年(八一六)の作に二年先立って、すでに「夜聞歌者」(文集卷十、感傷二)を作り、その鄂州における同じ経験をもとに、改めて一大巨編に作り上げたものだから、白氏がいかに力を入れたものであるかが理解できるであろう。

したがって「琵琶引」の引用は、同時に「夜聞歌者」の引用でもあり、両詩は精粗の別をもってほぼ同じ内容ではあるものの、やはり、別詩というべき条もあり、引用は双方をひびかせるものとなる。

たとえば「夜聞歌者」には、

尋声見其人 有婦顔如雪 独倚帆樯立 娉婷十七八

とあるが「琵琶引」では、

猶把琵琶半遮面

とあり、「老大嫁作商人婦」^なった、さらにその後のことであって、内容はこの点に関するかぎり、まったく別である。おそらく、若く美しい女が何か秘めた物語をもって月夜に琵琶を弾ずるといふ、わかりやすい情況が「夜聞歌者」であり、さらに複雑な人生観察を重ねて「琵琶引」ができたのであろう。

「琵琶引」の老女も年少のころの美と才とが歌われているから、この老女からももう一つの美少女の倂を消すわけにはいかない。そうした不即不離の関係で両詩は歌われるというべきであろう。

そこで、ここではまず第一に「夜聞歌者」の引用から見ておくことにする。

この詩には自注に「宿鄂州」とあり、鄂州での作として知られた

ものだが、それにもとづいて、源氏物語にも、

鄂州にありけむ昔の人も、かくやをかしかりけむと、耳とまり
て聞きたまふ。(紅葉賀)

と語られる。「琵琶引」の方には鄂州を明記しないから、まずは
「夜聞歌者」を引いたと考えるべきである。ここにも「琵琶引」の
引用をいうのは、当をえていない。

そこで源氏の右の言は、源氏が老女、源典侍と出会うところの一
節で、光源氏が

温明殿のわたりをたたずみ歩きたまへば、この内侍、琵琶をい
とをかしう弾きゐたり。(紅葉賀)

とあり、彼女は琵琶が、

御前などにも、男方の御遊びにまじりなどとして、ことにまさ
る人なき上手なれば、(紅葉賀)

というほどの名手である。このあたり、琵琶の名手だというのは
「夜聞歌者」にはなく、「琵琶引」が、

五陵年少争纏頭 一曲紅綃不知数
と述べるところにかなう。

そして源典侍は、今光源氏のつれなきに、
もの恨めしうおぼえけるをりから、(紅葉賀)

で、これも「夜聞歌者」が、

歌泣何凄切 一問一霑襟 低眉終不説

と事情を秘めたのに対して、「琵琶引」の方が、

商人重利輕別離 前月浮梁買茶去

と別離を設定することが、より状況を近くする。ただ、彈奏の後を、

弾きやみて、いといたう思ひ乱れたるけはひなり。(紅葉賀)

と抽象的というのは「夜聞歌者」に近い。その結論は上掲の如く
「低眉終不説」であったのだから。

このように「紅葉賀」の一節は「鄂州にありけむ人」といって、
直ちに「夜聞歌者」を思い出させながら、深く「琵琶引」に入り込
む格好で語られている。源氏の作者が両詩の關係を知っていた証拠
でもあるし、構成としても巧みに意図されたものだといえる。

それでは、この巧みな構成とは、具体的にいかなるものか。

まず第一に、源典侍は老女である。

年いたう老いたる典侍……

古めかしきほどなれば……(紅葉賀)

と語られるとおりで、従来、五十七、八歳と推測される設定である。

これに対して「琵琶引」の女が「老大嫁作商人婦」ることはす
にあげたが、同じ内容は序の中にも語られ、

年長色衰 委身為賈人婦

と、一層ことを強くして述べられる。

ところが「夜聞歌者」はすでにあげたごとく、「十七八」の美女
である。

こうした事実が、もし源氏の読者にただちに知られるところであるなら、そして私はそうにちがいないこと、つまり源氏の読者が二つの白詩を知っていたという前提で語っているのだが、その時には大きな運命の暗示が与えられるであろう。

いささか皮肉をまじえて、ユーモラスに好色ぶりを語られている老女にも、かつて花をあざむく美が存在したことを思い出させるであらうし、それが自らの意志にかかわりなく、人生という運命的なものによって奪い去られていくことを、読者は深く感じたにちがいない。

そして、こうした琵琶の名手がたどる人生こそ、「琵琶引」が強く訴えようとしたものであった。

逆にいえば「夜聞歌者」は、そうした人生を文脈の底に沈ませながら、ひたすらに美しい女性の、何ゆえかの涙を語るばかりなのである。

さらに、この人生の転変が他人事ではないと感じるところに、白氏の「琵琶引」述作の原因がある。老女の零落とひとしい運命を詩人も甘受しなければならぬこと、かくしていま江州に刺史たるところそが、白氏のもっとも訴えたかったことだ。

だから白詩のもつ、大きな人生の透視図の中に、いま紅葉賀が抱きかかえられている。表面的には老女の好色、それへの源氏の物好きなかかわりという、コミカルな表情を粧いながら、鄂州の女を一

滴、しみ込ませることによって、笑われ者なるものの意味を源氏は強く訴えることとなった。

源氏の設定はこの時十九歳と考えられる。まさに女と逆ではないか。ということは十七、八歳の女が如実に示す後日の姿を、当の源氏そのものの上に考え及ぼすこととなるであろう。そしてまた、右に述べた白氏の後半生——江州左遷も、考えの外におくことができなくなるはずだ。

ここにはまず、後日の光源氏の流滴がしのび込まされているのだと思う。

そう考える根拠は、他にもある。

そもそも「紅葉賀」一巻は、光源氏の十八歳から十九歳にかけての一年を描くが、この両年の源氏といえ、いうまでもなく、藤壺への思慕と密会、そして懐妊のはての皇子生誕の一年である。「紅葉賀」は巻頭を青海波を舞う源氏の華麗な姿から始めながら、実は藤壺との歌の贈答、深まる苦惱、皇子誕生、そして桐壺帝の讓位の決意へといたる、ほとんど藤壺の巻といってもよいように、藤壺の苦悩を描く巻である。

源典侍とのたわむれは、この苦悩を代替する遊びのように仕組まれてもいる。それは同時に未摘花のユーモラスな事件が展開するところと同様で、心の内外をこの二巻仕立てとしたときえ見られる。

もう一つ、「若紫」の巻が一部併行し、紫の上との事項が少しず

つ「紅葉賀」の巻に挿入されることも関係する。すべてが藤壺との関係、「紅葉賀」の主題とすることを蔽う、表面上のこととして設けられたものである。

この藤壺との関係は、上掲の「もの恨めしうおぼえけるをりから」に投影していないか。この句はすでにふれたように典侍の心情としても理解されるが、「もの恨めしうおぼえけるをりから、いとあはれに聞こゆ」という、聞いた主体を源氏とすれば、「もの恨めしうおぼえける」心は、源氏のそれとなる。

あるいは広く、恋の恨めしきとして両者をつつみ込むことも可能だろうが、少くとも源氏の心情を除外してしまふことはできにくい。いや、別にことばにこだわることもあるまい。久しい源氏の心理からいえば、藤壺へのことばに出してはならない苦悩が連続しているのだから、それをここから消すことはできないではないか。

すると俄然意味をもってくるのが「夜聞歌者」の末尾である。再掲すれば次のようにいう。

一問一霑襟 低眉終不説

いくら「歌泣何凄切」といっても、答えはただ涙だけであったということ、他人に語るべくもなかったこととは、何であったのか。

若いこの女は「琵琶引」のように、

惘然自叙少小時歛柔事、今漂淪顛顛轉徙於江湖間

(序)

というのとは反対で、年の盛りにある。何も泣かなければならない、

わかりやすい理由はない。

しかし眉を低れるばかりで、一切いわない十七、八歳の美女が「夜聞歌者」の主人公である。

すでに察せられるように、私はここに藤壺の傍があるのではないかと思う。藤壺は時に二十四歳と考えられており、十七、八歳ではないとしても、十分に若い。「有婦顔如雪」という一句を、源氏の作者はどういう思いで見えていたであろうか。

もし私の想像が許されるとすれば、ここにこそ、「琵琶引」ではない「夜聞歌者」を引いた理由があるであろう。

歌罷繼以泣 泣声通復咽 尋声見其人 有婦顔如雪 ……

夜涙似真珠 雙雙墮明月

というくだりを、藤壺の上に思い浮かべることは、きわめて容易ではないか。

それでいて、この内容は「鄂州にありけむ昔の人」ということばによってたぐられるだけで、表面は好色な老女がユーモラスに語られているところに、さらに大きな源氏物語の用意があるのではないかと思われる。

「夜聞歌者」から「琵琶引」に白詩が成長していった、その観察の成熟が源氏の構成を支えているであろう。源氏は、ただ感傷的に人生を見るのではない。

そのことを、私は「紅葉賀」が俗謡をまといつかせて成立させら

れている点に見る。

「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうて謡ふぞ、

(紅葉賀)

というのは、すぐ知られるように、催馬楽「山城」の一節である。

山城の 狼のわたりの 瓜つくり な なよや らいしなや

さいしなや 瓜つくり 瓜つくり はれ

瓜つくり 我を欲しといふ いかにせむ な なよや らいし

なや さいしなや いかにせむ いかにせむ はれ

いかにせむ なりやしなまし 瓜たつまでに や らいしなや

さいしなや 瓜たつまでに

この歌謡を歌うということは、瓜つくりが「我を欲し」といったという、そのことを言いたいからであろう。瓜つくりが女の「我」をほしいというのだから、光源氏が「瓜つくりになってほしい」という願望をこめたものであろう。光源氏が「瓜作りになりやしなまし」ということになる。

これは、右に述べた藤壺の佛とは正反対の世俗さであり、光源氏もまたこれに応じて、催馬楽の「東屋を忍びやかに謡」ったという。

東屋の 真屋のあまりの その 雨そそぎ 我立ち濡れぬ 殿

戸開かせ

錠も 錠もあらはこそ その殿戸 我鎖さめ おし開いて来

ませ 我や人妻

これも戸を開けという具体的な要求を俗謡によってしたもので、世俗性は一層強まる。

典侍はさらに「おし開いて来ませ」と答え、事態は進展する。世俗性も引きつがれてゆく。

こうしたことを、作者がやはり好色な老女の異常さとして語ろうとしていることは、事実だろう。

このシニカルな目は、「夜聞歌者」どころか「琵琶引」すらも持たなかったもので、またしても源氏物語の作者の、恋愛への冷やかな視線を感じてしまう。老女の世俗性は、その象徴的な現われである。

その中で、上述の藤壺との苦悩もまた、単純な恋愛の思慕をこえて、もっと本質的な人間の問題となって来よう。

かりに、まったくかりにだが藤壺の老後を考えたとしたら、藤壺もまたこうした老醜を免かれたいのである。それを排除する力は、理知にしかないが、愛欲の前に理知がいかに無力かを語ることも、源氏の大きな主題の一つであったと思われる。しいて言えば出家しか救済がなかったほどに、彼らは絶望の中にいたからこそ、当面の藤壺の問題も浮上してくるといってもよい。作者はそれを見通していたと思う。

そこで、つまり世俗性が単に卑しいな好色心をのみ語るのではなく、それをもひき受けてしまうとところに愛の因果があるのだという

理解に立てば、「東屋」の引用の見方もまた変わってくる。

「東屋」は「殿戸開かせ」に主眼があるとしても、返歌にあっては「我や人妻」という点を強調する歌謡でもある。

そして光源氏は「東屋」を口ずさんで寄っていきながら、

人妻はあなわづらはし東屋の真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ

とてうち過ぎなまほしけれど、
(紅葉賀)

ということになるのである。

そこで、なぜ主題が人妻に移動するかが興味深いところであろう。やはり潜在的な主題が藤壺に戻ったといつてよいのではないか。

「人妻はあなわづらはし」という表現は藤壺に似つかわしくない粗雑さをもっているが、古く「万葉集」でも「人妻」ということばが民衆に使われるものだったことを考えると、最後まで、源氏物語の作者の目は、感傷に溺れず、強く現実を意識しながら、ついに藤壺思慕という紅葉賀一巻の主題を、放棄しなかったというべきではないか。

さて、右のような「夜聞歌者」の「紅葉賀」における引用を基盤として、後に「琵琶引」の引用が行なわれる。

その第一が「賢木」の巻に見える。「琵琶引」は、かつて琵琶の名手として都に名をはせ、

今年歡笑復明年 秋月春風等間度

という生活をすごして来たが、その後、

弟走従軍阿姨死 暮去朝来顔色故

の如き情態になり、ついに、

門前冷落鞍馬稀 老大嫁作商人婦

と語られるのだが、この「冷落」のさまを源氏物語は次のように引用する。

除目のころなど、院の御時をばさらにも言はず、年ごろ劣るけ

ぢめなくて、御門のわたり、所なく立ちこみたりし馬車うすら

ぎて、宿直物の袋をさをさ見えず。

(賢木)

物語の設定では源氏二十四歳の正月、前年十一月一日に桐壺院が崩御して、源氏の上にも凋落のきざしが見えはじめ。除目のころともなると昇進を当てる人たちの出入りも、今までは多かったのに、今年は馬や牛車を見かけることも、宿直の者も減った、というのである。

そこで、この「馬車うすらぎて」というところに、上掲の「鞍馬稀」の影が見える。⁽¹⁾ 零(冷)落を稀になった鞍馬で表現するところ、やはり共通性を認めるべきであろう。

そしてこれは須磨、明石への謫居とつながってゆく。それを決意するのは二年後である。

すると、右の「紅葉賀」で認めた、先ぎきの源氏流謫への暗示は、この「賢木」を中間項としてゆるみなく推し進められていることに

なり、「琵琶引」(および「夜聞歌者」)の引用が、一貫した意志によって行なわれていることが知られるであろう。くり返すこととなるが「琵琶引」が単に妓女の流離を歌うのではなく、白楽天自身の流離と一体となって歌われているからである。

しかも、この折にも、先に確認した藤壺との密接な関係が存在することは、引用の意志を一層強く感じさせることとなる。右に掲げた「賢木」の一節は、直前に藤壺の描写が見られるのである。

すなわち、

渡らせたまふ儀式変らねど、思ひなしにあはれにて、旧き宮は、
かへりて旅心地したまふにも、御里住み絶えたる年月のほど、

思しめぐらさるべし。

(賢木)

というのがそれで、かえって住みなれた院の御所の方が里邸のようにさえ思うというのは、源氏とのしがらみから解放されていない様子うかがわせる。そのしがらみについて、御門わたりの鞍馬の稀なことを、作者は語るのである。

この藤壺の三条宮への退下の様子もわびしい。

雪うち散り風はげしうて、院の内やうやう人目離れゆきてしめ

やかなるに、

(賢木)

というのは、多少視点を変えつつ同じ「人目離れゆ」く有様を述べたものだといわなければならない。

その上に、他の「女御御息所たち」も、院の四十九日をすぎると、

「散り散りにまかだたまふ」。そして源氏もふくめて「みな外々へと出でたまふ」こととなる。

要するに院の御所も、今や「門前冷落鞍馬稀」になったのであり、それと連動して源氏の「御門のわたり」も鞍馬が稀になったという段取りである。

「琵琶引」における冷落は妓女のそれで、必ずしも院や源氏と並べるのは不適當と思われる面もあるか。しかし、以上のように考えてよいなら、妓女の冷落は白氏のそれであり、それがまた光源氏の同じ運命になる、といった構図をもつ。

また藤壺を「夜聞歌者」のイメージに重ねた上でいえば、その後としての「琵琶引」の妓女の冷落は、藤壺にもおもむろに訪れている冷落を語ることとなり、右のような三条宮への退下のわびしい姿となったのであろう。

こうした藤壺や光源氏をふくめ、さらに多くの桐壺院一統にしのびよって来た「冷落」があったことを代表して、光源氏の「御門のわたり、所なく立ちこみたりし馬車うすらぎて」という表現となつたと思われる。

この大きな変転のもとに藤壺との事があるとすると、その「紅葉賀」からの文脈を、潜在的に支えるものが「夜聞歌者」を包みこんだ「琵琶引」の作だったのである。

二 「琵琶引」―明石

「琵琶引」は、その後「明石」の巻に登場する。右の「賢木」より二年後、須磨に謫居してから一年が経った初夏の月夜、光源氏が明石の入道と語り、娘が琴を弾ずるくだりである。

商人あきどの中にてだにこそ、古ごと聞きはやす人ははべりけれ。琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人いにしへも難難うはべりしを、をさをさとどこほることなう、なつかしき手など筋ことになん。
(明石)

この商人の中にさえ古ごとを聞きはやす人がいるという、その故事が、文集の、

老大嫁作商人婦

をさすという考えである。序の中にも、

年長色衰 委身為賈人婦

とあり、「琵琶引」の指摘は諸注に多い。

ただ、文章に多少こだわると疑問がないわけではない。「古ごと」を商人が聞きはやすというのだから、「古ごと」は「琵琶引」でもきていることになるが、何も「古ごと」ではない。

源氏で「古ごと」というのは、先立って、今様の演奏を批判しており、おそらく古来のりっぱな演奏をいうのであろう。入道も奥ゆかしく「弾き伝へたること三代」の弾き手だというし、そうした本

格的な琴の演奏を「古琴」といったと解しておきたい。

また、源氏は「商人の中にてだにこそ」「聞きはやす人ははべりけれ」といい、「聞きはやす人」として商人をあげる。「琵琶引」が、商人の婦となった妓女がりっぱに弾くというのは、多少異質である。

念のために辞書（日本国語大辞典）についてみても「いま一声ききはやすべき人のある時、手な残い給ひそ」（帚木）「右の大臣『和琴いとおもしろし』などききはやし給ふ」（紫式部日記、寛弘七年正月一日）「人ぎきはれいざまに、ききはやし給ひがほなるに」（とりかへばや物語）などの如くで、この場合やはり商人が音楽を聞いて感心したという意味のようである。

したがって別に、そうした故事があった可能性もあるが、しかし商人が妓女を妻としたことをもって、「聞きはやす」といったとも考えられる。しばらく旧説にしたがって「琵琶引」の故事を引いたと考えておこう。

さて、こうして「琵琶引」の引用とみると、その用意をさまざまにうかがうことができる。何よりも「紅葉賀」から流れてくる大きな流れ、源氏の本流にも根ざす藤壺との事件を原因とする光源氏の心の落魄の歴史、そしてその具体的な現われとしての須磨、明石への謫居という展開の中で、いま流謫の境遇そのものに身をおく状況にある。「琵琶引」はそれを喚起せしめる働きをもつ。

そうした大きな暗示の中で、さまざまな関係が見られる。まず、右のような流謫の表現であつてみれば、序の、

聞舟中夜弾琵琶者、聴其音錚々然、有京都声

という「京都声」は何よりも大切であろう。この女は「本、長安倡女」であり、世に聞こえた都の「穆曹二善才」に学んだという。白楽天も、だから女の楽に都を嗅ぎとつて悲しんだのだが、源氏もそれに呼応するように、古楽のゆかしさを話題とする。

嵯峨の御伝へにて、女五の宮さる世の中の上にもものしたまひけるを、
(明石)

というのは正統な宮廷における「京都声」であり、ところが今は失われてしまっているのがなげかわしいのだが、しかし、

ここにかう弾きこめたまへりける、いと興ありけることかな。

いかでかは聞くべき。

(明石)

と、この都遠い地にあつて接することができる、正統な楽へのゆかしさが語られる。こうした叙述によつて「琵琶引」は「明石」の望京の念に奉仕することとなる。

もっとも古楽ばかりがよいのではない。「京都」はむしろ華美にあることが特徴でありつづける。源氏でも、

すべてただ今世に名を取れる人々、かきなでの心やりばかりにのみあるを、
(明石)

と、今様をおとしめるが、それも「かきなでの心やりばかり」の浮

薄さは、一面の都の特質である。

この妓女も、かつて都にあつて、

五陵少年争纏頭 一曲紅綃不知数

鈿頭銀篋擊節碎 血色羅裙翻酒汚

という状態で、まさに「歡笑」の中に日々を送っていた。

今年歡笑復明年 秋月春風等間度

の如くである。こうした少年のころの逸樂がやがて老年の失樂へと移つてゆくという発想は「少年行」としてしばしば中国詩が歌うところではあつても、やはりこの詩の大きな主題の一つである。

ところが、逸樂の京都とちがつて、今は謫地にいる。

我従去年辞帝京 謫居臥病潯陽城

潯陽地僻無音樂 終歲不聞糸竹声

住近湓江地低湿 黄蘆苦竹繞宅生

其間旦暮聞何物 杜鵑啼血猿哀鳴

というのが白楽天をとりまく江州の風情である。

源氏にあつても、須磨・明石が同様であることはいうまでもない。須磨のわびしさはすでに先立って読者の脳裏に入っているのだが、ここ明石においても、入道こそりつぱな邸宅にいるにしても、それは鄙にはめずらしいものとして描写されるものであつてみれば、鄙はやはり鄙である。

はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか、春秋

の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなり繁れる蔭ども
なまめかしきに、水鶏くひなのうちたたきたるは、誰が門さして、と
あはれにおぼゆ。

(明石)

にしても、文脈上肯定的に書かれてはいるが、実は、はるばると海面は広がっており、木蔭は一面に繁っていて、人家が密集しているのではない。

その中で、いかにも田園よろしく水鶏が鳴く。叙述は白詩にくらべてよほどやさしいけれども、大同小異の内容である。

そして、白詩にあつてはとくにいま琵琶の声を聞いており、詩の中でも情況として「終歳不聞糸竹声」という中であつて、それが生きてくるのは、単に周辺の荒涼が心を悩ませるだけではないことを物語っている。

すなわち、白詩ふうにいえば「琴詩酒の友」を欠くことの恨みこそが、心を悩ますのである。すでに「琵琶引」も、

同是天涯淪落人 相逢何必曾相識
と孤独の身を嘆いており、その中で、

春江花朝秋月夜 往々取酒還独傾
と酒をひとり酌むわびしさを告げる。そしてその上で

豈無山歌与村笛 嘔啞啁嘶難為聽

とすぐれた糸竹のないことを訴えるのである。これらによれば白楽天の謫居の嘆きは、なかならず音楽を中心とする琴詩酒の友のない

ことにあり、そこで音楽をきいて「相逢何必曾相識」という感興を催したものであつたことがわかる。

「僻無音楽」とは、ただ音楽のすぐれた演奏に接しないということではないらしい。いわば、文人としての最低の生活環境といったものへの飢餓であり、そこに響いてきた「京都声」が彼を救済したのだった。

だから白楽天は琵琶の音をきき、

感斯人言、是夕始覺有遷謫意。

と序に述べる。音楽と女の語るところが、飢餓を明瞭にしたのである。

そのことは詩の中にも見られる。

絃々掩抑声声思 似訴平生不得志

低眉信手続々彈 說尽心中無限事

とは、音楽によってさそい出される謫居の思いを語るくだりである。志とか心中とかとよばれるものは、音楽を欠く謫地の僻遠性であった。

それがいま、琵琶によって顧みられることとなった。「琵琶引」を源氏が応用しようとした根拠も、実は同じところにある。

この「明石」のくだりで、なぜ音楽をこれほど大事に扱うかという疑問に対しては、それを措いて答えがたいであろう。広く源氏全体、いや王朝物語全体において音楽は大きな位置を占めて扱われて

おり、源氏もその例外ではない。しかしこの「明石」のくだりを、一般のものとするにはあまりにもこだわりすぎており、入道が琵琶を弾くことによって雅友たりえる構造を示していると思われるべきだろう。

その上に「琵琶引」が重ねられた。だから当面の話題は琴や箏をめぐった後に琵琶に転換され、

琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人いにしへも難うはべりしを、をさをさとどこほることなう、なつかしき手など筋ことになん。
(明石)

と、娘の琵琶の弹奏となる。「げにいとすぐいて掻い弾きたり」とは、広く琴の雅びへの満足があり、その上で「琵琶引」が謫居を思ひ出させて作者を肅然とさせた、それと同じ感動を語るものであるう。

そもそも娘を琵琶の名手に仕立てたこと自体が、「琵琶引」からの発想だったろうか。「琵琶引」によれば上掲のように「相逢何必曾相識」とあり、また「感斯人言、是夕始覺遷謫意」とも語られており、琵琶を通じて心が通った趣である。

一方源氏においても、こうして琵琶につけて入道は娘のことを源氏に語り、やがて源氏は、

このごろの波の音にかの物の音を聞かばや。さらずはかひなくこそ。
(明石)

というようになる。琵琶を通して心が近づきつつある様子であり、さらには源氏の明石からの上京に際しても、琴を弾じつつ二人は惜別する。

明後日が出発という日になると、源氏は、

京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかに掻き鳴らしたまへる、深き夜の、澄めるはたとへん方なし。
(明石)

の如くであり、女——明石の君の方も、

みづからもいとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なきに、さそはるるなるべし、忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。
(明石)

という。

こうしてみると、明石の君と源氏との関係から音楽をとり去ることとはむずかしい。くり返し、当時の物語における音楽の位置の大きさを顧みても、やはり二人を結ぶものが琴や琵琶であることは看過しがたいであろう。あえて「琵琶引」の構想をとり入れたというのは早計だとしても、出来上がった物語から「琵琶引」を消すことはできない。

もう一つ、「琵琶引」の中には、

別時茫茫江浸月

と江上の月がある。月明の中で琵琶を弾じるのだが、源氏もなぜか

月を音楽のまわりに配する。

当面問題としている、入道と語る夜、商人が聞きはやすという時も、季節は白詩の秋と違って夏ではあるが、四月の、

のどやかなる夕月夜に、

(明石)

淡路島を眺める夜であり、談が進むにつれて、

いたく更けゆくままに、浜風涼しうて、月も入り方になるまま

に澄みまさり、

(明石)

と月が移ってゆく。あくまでも月明の夜である。

また、女を源氏が訪れるのも、四か月後、中秋八月の、

十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」

と聞こえたり。

(明石)

道のほども四方の浦々見わたしたまひて、思ふどち見まほしき

入江の月影にも、

(明石)

といった月明の中である。

その上、源氏は場所柄音楽が「荒き浪の声にまじるは、悲しくも思うたまへられながら」と述べ、「このごろの波の音にかの物の音を聞かばや。さらずはかひなくこそ」と光源氏を思わせるなど、音楽を波の音ともどもに読者へと送ってくる。

それは都ではけっして経験できないことだから、謫居の一部をなす風景であるが、一方白詩においても琵琶を湓浦の船中できいたとあり、詩の中でも、

薄陽江頭夜送客

別時茫茫江浸月 忽聞水上琵琶声

逸船明月江水寒

と歌われ、音楽は月のみならず水とともに描写される。

月と水とに圍繞されたものとして琵琶が奏でられ、その情景は源氏のそれともひとしい。

こうした一致は、かりに商人云々という一節から読者が「琵琶引」を嗅ぎとったとしてその時に、その自然な伝達を助けるものとして巧まれた結果なのであろうか。かりに商人云々という設定が白詩によるものだとしても、周辺の道具だてがまったく不調和では、何の意味もなさないであろう。というよりさまたげとなって失敗するであろう。そうした中で考えれば、月と水はお詠え向きの「琵琶引」を迎え入れる条件となっており、作者の意識・無意識を越えて、必然的な構成であったと思われる。

「明石」における「琵琶引」はこうした諸点にとりまかれながら、「琵琶引」の流謫の感を源氏にとり入れるスイッチとして一句が引用されたと考えられるが、さらにもう一つ、忖度すれば、より「琵琶引」をしのび込ませた結果として、次のような一致も計算の中にあつたのではないかと思われる。

源氏によれば、光源氏二十八歳の夏、つまり右に述べた中秋の名月の逢瀬の翌年、離別に先立つ夏六月ごろに明石の君の懐妊を記す。

後に明石の中宮と称せられる女子が誕生したのは、この翌年の三月であった。

ところが白楽天が江州の司馬に左遷されたのは元和十年(八一五)六月で、十月に任地に到着した。そして翌十一年の秋に作られたのがこの「琵琶引」であり、同じ年に子の阿羅をもうけている。

つまり阿羅の誕生と明石の君の懐妊および女子の誕生はちょうど江州左遷、その地での「琵琶引」の作が明石謫居と重なっており、もし源氏の作者が「琵琶引」の引用のみならず、白楽天の流謫そのものをも考え及び、流謫と子の誕生という事件を人生の一つの示唆として受取ったとすれば、白楽天の生涯そのものも光源氏の境遇に重ね、子の懐妊、誕生を仕組んだことになる。

換言すれば「琵琶引」とは、こうした作者の境遇を抱えこんだ作品だと読まれたことを意味している。つまり単に商人の妻となったという人生の転変のみならず、それと相応ずると歌った作者そのものの人生の転変を、まるごと引受けた引用が、源氏の「明石」のこのくだりだということである。

はたして、そういつてよいであろうか。そもそも白氏が江州司馬に左遷されるに到った理由は、諫官としての職務をまじめにつとめすぎたことにある。左拾遺というのは諫官で、そのために例の「新樂府」五十首を作り、また京兆府戸曹參軍の職に転じた後でも「秦中吟」十首を作っている。

すでに「長恨歌」の作者としての名声があり、溢れるような才能への自負があったゆえであらうし、事実、右の詩は多くの人々からもてはやされた。

しかし、さらに移った太子左贊善大夫に不満で、諫書をまたたてまつるとついに越権がとがめられる。白楽天を弾劾したものととして王涯という詩人が知られているが、もう一つ宰相武元衡の暗殺への関与もいわれる。

どこまでが真実か、真偽のほどは知りたいが、もっとも根底にあるものは才多きものへのそねみであろう。そのことよって敵対者から足をすくわれるのである。「名声の清算としての左遷」⁽²⁾という評言は当ていよう。

そしてこのことは、光源氏の上にも多かれ少なかれ存在したはずである。光源氏が須磨に退居しようとした理由は朧月夜の事件、その結果としての官爵の剝奪という先行きが考えられるとしても、結局は弘徽殿がわたの長年の確執が原因であろう。

そしてこの確執が生じたそもそもの原因は高麗の人相見がいち早く見抜き、処置したはずなのに処置し切れていなかった、光源氏の異常なほどの能力にある。

そうした人間がたどる運命を、なかんずく藤壺への恋——畏るべき超越の意志にからみ合せて作者が考えていたとしたら、白楽天という一大詩才の持主のもつ運命を、それに比べてみることも、あつ

たにちがいない。

源氏物語の作者にとつては、政治抗争の力よりもむしろ文学的才能が注目されがちだったろうし、白氏の名声は日本にもあまねく存在したから、光源氏の運命に白氏のそれを重ねるのに、それほど距離はなかったであろう。

もしそうした心理まで源氏の作者がもっていたとすれば、阿羅の誕生を「明石」の構想にとり入れることはありえただろう。その一環として「琵琶引」の応用がなされたというべきである。

三 琵琶引—横笛

「琵琶引」の引用は、もう一か所の指摘がある。「横笛」の巻は柏木遺愛の笛が未亡人の母、一条御息所から夕霧に贈られ、さらに源氏の許へと渡ってゆくいきさつを中心とする巻だが、笛が贈られるに先立って、一条の宮を訪れた夕霧と御息所との間に楽器の演奏がある。

琴、箏、そして琵琶が弾ぜられるが、その折、御息所が、

「かれ、なほ、さらば、声に伝はることもやと、聞きわくばかり鳴らさせたまへ。ものむつかしう思うたまへ沈める耳をだに

明らめはべらん」と聞こえたまふを、

(横笛)

とある。目の前にする和琴に、なき柏木の心がこもっているなら、やはりその音色に心が伝わることもあるだろうから、心が聞きわけ

られるほどに弾いてくれ、というのである。とかく心がふさぎ込んでいる、その耳も明らかにしたい、と願うからである。

そこで、この「耳をだに明らめはべらん」について、古注(河海抄など)以来諸注に「琵琶引」の、

今夜聞君琵琶語 如聽仙樂耳暫明

の引用がいわれている。「琵琶引」のこれは妓女の樂をきいて、まるで仙人の音楽をきいたように耳が明らかになった、というのである、この江州謫居の身にも山歌や村笛はあるが、田舎びていきぐにたえない、といった上での発言である。したがって、もし引用を認めるとすると、かの白樂天が琵琶を聴いて耳を明らめたように、耳だけでも明らかにしたい、という気持である。

しかし、「横笛」の情況は先の「明石」などと違って流謫などではない。藤壺事件がからんでいるのでもない。両者は、はなはだ異質だというべきだろう。

また、「耳を明らむ」という表現自体、それほど個性をもつものではない。一般的に用いられることばとも思えるので、何もここに「琵琶引」をもってこなくてもよい、という気もする。

にもかかわらず「河海抄」などが「琵琶引」を指摘し、実証的に手堅さを誇る近代の研究が「琵琶引」を無視しえないのは、何ゆえであろう。

この直観のもとづくところの一つに、耳を明らかにするというこ

との意外な組合せがあるかもしれない。本来明なるものは目についていい、耳のさといことは聡という。そこに聡明の語ができることはいうまでもないが、この耳と明との組合せに白楽天の句いがあるといえようか。

そして「ものむつかしう思うたまへ沈める耳」とは、御息所の場合、不運な死をとげた柏木への物思いではあるにしても、この表現をかりて江州謫居の白楽天の心情をいうこともできる。ともに、失意の悲しみの中にある身で、一条の宮も「あてに気高く住みなし」てはいても「うち荒れたる心地す」る様子である。

思うに、一条の宮の人々は精神の流謫の中にいるといふべきだろうか。その中に今、なき人の魂がこもるとされる琴が奏されようとしているのである。

「横笛」は、さらにこれにつづいて「羽翼^{はね}うちかはす雁^{かり}がね」を描く。一読して知られるように、白詩「長恨歌」の比翼連理の連想がしくまれている。

そしてさらに、箏の琴について琵琶が動員される。曲は想夫恋である。ここに琵琶が登場するのも、右の「琵琶引」を前提として読めば、有機的な関連をもつように思える。

想夫恋は夕霧の落葉の宮思慕にかかわる段取りである。御息所を中心とする故人思慕、知音の仲であった柏木への夕霧の追憶とないまぜになりながら夕霧と落葉の宮との心情も語り進められ、ここに

は多くの心の交差がある。さし交わし合う心と心との中で、いま音楽が奏でられるのである。

その上、とくに遺愛の笛には柏木の生命がこもり、柏木はその笛をわが子の薫に伝えてほしいと願っている。

笛竹に吹きよる風のことならば末の世ながき音^ねに伝へなむ

(横笛)

という歌は、その願望を歌ったものとされる。

知音の友であった夕霧に託されることにも、せめてもの生命の授受があったのだが、さらにわが子に伝えることこそ、正統な生命の伝達であろう。

かりに将来のそれを考えたとしても、源氏が笛をあずかることになる構想は、柏木対源氏の葛藤をかえりみると、また一つ複雑な生命のしがらみを作者が用意したように思えるが、要はそれほどに、笛のもつ霊性を作者が評価しているということである。

どうやら笛のもつ意味は大きいらしい。そして笛にとどまらず、琴、琵琶をそれに準じて考えなければならぬらしい。

そうすると、これらの楽器を媒体として生命が継承され、心がい寄せられてくるという人生の仕組みを、重く評価するべきであろう。

そんな楽器の作用は、流謫か否か、妓女か否かという現象的な差異など、はるかに飛び越えてしまうかもしれない。もし先学がこの

「耳を明らめる」という片言隻句に、楽天流謫の情を目ざとく見つけたとすると、人の世のあり方はそのようにあるのだという、強力な証拠でもあるだろうか。

「耳をだに明らめはべらん」という「だに」は、かりに仙樂を聴いても江州流謫は変わらず、柏木は帰って来ないことをいう表現だから、それだけ楽の音への信賴を強く表明していることになる。

音楽は、そうした超越的な次元において、妓女と楽天の心を一致させたし、今も御息所と夕霧の心を一致させることが期待されているのである。

この白詩の引用は、こうしたふしぎな、情況の捨象力と、それにとまなう心と心との吸引力を語るものだったように思われる。

四 三月三十日題慈恩寺—藤裏葉

白樂天は長安、進昌坊の慈恩寺をおとずれ、慈恩寺に題すという七言律詩を作った。三月三十日のことである。

慈恩春色今朝尽 尽日徘徊倚寺門

惆悵春悵留不得 紫藤花下漸黄昏

(文集卷十三、律詩)

この詩は後に芭蕉が「草臥れて宿かる頃や藤の花」とよんで有名になったが、古く源氏物語の中にも、いち早い応用が見える。

巻の名も「藤の裏葉」と名づけられた一巻は、かねて雲居雁に心を寄せる夕霧をうとんじていた内大臣側が、その仲を許すくんだりか

ら始められるが、その一節、

四月の朔日ごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむこと惜しき盛りなるに、遊びなどしたまひて、暮れゆくほどのいとど色まされるに、頭中将して御消息あり。

(藤裏葉)

と、内大臣から便りが夕霧の許に届く。その手紙には過日の花の宴でのことが記されていて、

一日の花の蔭の対面の、飽かずおぼえはべりしを、御暇あらば立ち寄りたまひなんや

(藤裏葉)

という誘いであった。内大臣は、

わが宿の藤の色こきたそかれに尋ねやはこぬ春のなごりを

(藤裏葉)

という文を藤の枝につけた。夕霧は異存なく、

なかなかに折りやまどはむ藤の花たそかれどきのたどどしくは

(藤裏葉)

と答える。

そこで右の一段に慈恩寺の詩が投影しているという。なかんずく内大臣の歌についてで、ほとんど諸注に異論はない。もちろん夕霧の返歌も、それを承けて作られた。

しかし、仔細に見ると、どこに白詩があるのだろうか。源氏は先立つ部分から「暮れゆくほどのいとど色なされるに」といい、歌で

も「藤の色こきたそがれ」といつていて、たそがれを迎えて色が濃さを加える趣を問題にしているが、白詩では藤の花の下に黄昏がしのび寄っているというばかりである。しかも白詩は三月尽の作で春が去ることを悵惆し、その上にもう明日は夏になるという黄昏がやって来ているのだから、主な点は時間の推移にある。力点は異なるといふべきだろう。

しかし、にもかかわらず両者を絶縁することはむづかしい。

おそらくその理由は、白詩の簡潔な「紫藤花下漸黄昏」という、たったそれだけの句が含有する世界の大きさによるであろう。たとえ時間が経過し、やがてまったく春が去ってしまふ夜を迎えようとしていたといったとしても、その時の藤の花が黄昏を迎えて一段と陰翳を濃くしている有様を、否定するわけにはいかない。

藤の花は朝昼それぞれに美しいとしても、この、とりわけての黄昏の色の美しさを発見したことは、源氏の手柄であった。そして、この藤の花の美しい陰翳を場面全体に拡大して、源氏は一場の風景を作り上げた。逆にいえば白詩は源氏のこの一場の描写の中に、溶解せしめられて、どれを白詩と際立たせることなく、全体をひたすこととなった。まるで、一面に咲いた、黄昏の藤の花の陰翳のようにな、といつてよいだろう。

これを方法的に暗喩などと呼ぶと、固苦しくなるろう。しかし明らかに語句を際立たせて、そこから原詩の全体や詩想をたぐり寄せ

させるというのは、また別の試みであったことは、言っておかなければなるまい。もっぱら情調的でもある、原典の溶解を手段としたものである。

それでは、この情調的溶解方法は、何を目的としたものであったか。

いささか広い話をするに、「藤裏葉」一巻は、まことに華麗な一巻である。源氏は来年四十の賀を迎えようとしている。その準備のさまがすでにこの巻から見え始める。四十が人生の大きな区切りであったことはいままでもない。源氏は准太上天皇の地位にもほった。

また明石の姫君の入内もきまる。秋には六条院に行幸を仰ぐ。

そして、これらに先立つのが先に問題とした内大臣の夕霧に対する承認である。内大臣家の雲居雁と源氏方の夕霧との関係を許すというのは、両家の和解の成立を意味する。源氏がわが子夕霧にわが衣を与えて内大臣家へ送り出すというのも、夕霧が夕霧単独ではなくて、源氏方全体を背負っていることを意味しよう。

まさに、源氏自身は絶頂期を迎え、両家の確執のしこりも消え、陽光のみち溢れる風景が「藤裏葉」一巻に見られる。源氏物語はなお「若菜」上下の大きな巻を控えてはいるものの、ここで一つの大きな頂上に「源氏一代記」が達しているようである。

これを藤の花の咲きほこる様子で象徴させることは、まことに効

果的であろう。全体を藤の色に塗り込めた理由は、そこにあった。

しかし、しからば巻名も藤花とでもすべく構想すればよいではないか。内大臣に「藤の裏葉の」などと誦じさせなければよいではないか。

そのことを考えると、私は藤の裏葉をもって暗示されるものが、いま必要だったと思う。いや、巻名のことではない。内容的に「裏葉」がふさわしいのである。

というのは、雲居雁と夕霧との事件には大宮が終始かわりつづけているからである。大宮にとっては二人とも孫にあたり、何かとこの二人をとりもつ役目が負わされている。

そしてこの年三月二十日の極楽寺における大宮の忌日をきっかけとして、内大臣の心に変化が見られ、先の藤の宴への招待となった。折しも桜が散り乱れる中、内大臣も、

今日の御法の縁をも尋ね思さば、罪ゆるしたまひてよや。

(藤裏葉)

と夕霧にいう。「昔思し出でて」いたからである。

一方夕霧も、

過ぎにし御おもむけも、頼みきこえさすべきさまに、承りおくことはべりしかど、ゆるしなき御気色に憚りつつなん。

(藤裏葉)

と答える。大宮からも内大臣を頼るよういわれていたというので

ある。この法会における贈答をきっかけとして、十日すぎの藤の花の贈答となる。

だから、和解をもたらしたものは死せる大宮に他ならない。そして藤の宴の後に夕霧と雲居雁は結ばれ、やがては夕霧・雲居雁夫妻の、旧大宮邸への移住となるのだから、二人を結んだものは、長い間の大宮の心づかいだったことになる。

この大宮の心づかいを「ただに見過ぐさむこと惜しき」ものだと比喩するとしても、おかしくないだろう。

そして今、なくなってしまう後から追憶すると、「暮れゆくほどのいとど色まされる」心ばえであったといえるだろう。

大宮の魂が内大臣家にこもっているとすれば、「わが宿の藤の色こきたそがれ」と、表現することも可能であろう。

要するに大宮は藤の如く高貴に美しい人間であり、その忌日のなごりの中で両家を和解へと導く遺徳をもつのであり、それも命すぎてますます遺徳を濃くするものであった。

過日も「花の蔭の対面」であったが、今もたそがれの藤の中で、本当の対面が行なわれようとしているのである。

私は先に溶解といったが、全体にたちこめた藤色の美しさは、大宮の存在の美しさであった。すでになきその人を漂わせるのには、溶解せしめることが最良の方法であろう。

その「花蔭」の働きは、全体を大きく蔽うべき藤の裏葉といいか

えてもよいではないか。栄耀栄華を極めた、藤の花の華麗な開花のさまは、まさに両家の様子だが、実は女主人公は裏葉のような大宮であったのである。

さてそこで、この描写について、作者はなぜ慈恩寺の詩が必要だったのか。単に引用などなく、和解を語ればよいではないか。

そう思うことももつとのだが、実は慈恩寺にはいきさつがある。

唐の太宗、貞観二十二年（六四八）に建てられたこの寺は、皇太子、のちの高宗が母のために建立した寺なのである。慈恩をたたえるための建立で、その名がある。

曲江の北にあり、今ももとの曲江といわれる田野を望むと、彼方に大雁塔がそびえている。大雁塔の影を映す池が曲江だったことをしのぶことができるが、そのように景勝の地であり、藤の花が美しいとなると慈恩寺も遊覧の地ではあったろう。そのものとしての名も日本に聞こえていたであろうが、しかし源氏物語の作者は、遊覧の地として名高い慈恩寺を用いたのではあるまい。

むしろ慈恩という寺名から想起される建立の由来を、作者は忘れていなかった。

とすれば、今の大宮を主軸にする物語に慈恩寺の詩が想い出され、これを利用することは、当然思いつくところであろう。そしてこの着想は、まことに見事ではないか。大宮の慈恩によって両家の和解が成立したのであり、さらには大宮の慈恩は、大きく内大臣家にも

源氏側にも及んでいる。

紫藤花下漸黄昏

という「花下」は大宮の慈恩の及ぶところを意味するであろう。よくやく黄昏が到る藤の花は大宮のなごりであり、そのなごりの中で、大宮という藤は、一層色どりを濃くするのである。

くり返すが、大宮の配慮は長く源氏物語の筋にかかわっている。そうした大宮という藤のあり方は、一個所の叙述のために引用を際立たせて用いられるべきではない。

また、慈恩はいまなごりとして人々の上に漂っている。白詩の「漸」ということばが示す、ゆったりとした徐ろさをもって、漂っている。それを示すものとして、慈恩寺の白詩は、全体をひたすように用いられなければならない。

ただここで一つの問題は、源氏が白詩の三月三十日を四月朔日にかえたことである。なぜ三月三十日として語ってはいけなかったのか。

おそらく当時の日本人にとって、すでに藤の花を夏の花とする季節感が定まっていたのではないかと思われる。右にもふれた花の折は三月二十日と設定されており、この桜の落花を晩春の最後とし、夏の藤へと移ってゆく季節感が自然だったのではないか。

その結果、藤を四月とすることで、かえって白詩のもつ惜春の情を逃れえたとはいえる。大宮はむしろ今、生きて働いて和解せしめ

ようとしているのであり、過ぎ去ったもの、ないし過ぎ去ろうとしているものではない。「四月の朔日ごろ」とすることは、むしろ必要でもあった。⁽⁴⁾

五 冬至宿楊梅館―須磨

光源氏は二十六歳の春、須磨の謫居に赴いた。その不本意な須磨への到着は、次のように記されている。

うちかへりみたまへるに、来し方の山は霞遙かにて、まことに

三千里の外の心地するに、權の雫もたへかたし。

ふる里を峰の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲るか

つらからぬものなくなむ。

(須磨)

そこでこの「まことに」ということばからも察せられるように、

「三千里の外の心地する」は他の文献によるものである。

それは次のものと指摘されて来た。

冬至宿楊梅館

十一月中長至夜 三千里外遠行人

若為独宿楊梅館 冷枕单床一病身

(文集卷十三、律詩)

したがって源氏の作者は、白詩の一節とあい応する心境をもつて現状を合点したのであり、白詩が明らかにさまに応用されたものとして、右を見ることができるといえる。

もつとも三千里外といいながら、難波、須磨の間は海上四十八キ

ロメートルだという。いかにもオーバーな源氏の表現だが、流離の思いはひとしかったのであろう。

そこで、つまり作者が引合いとして出すべく考えた白詩の内容が吟味されなければ、単なる遠さだけとなり、遠さなら大仰なと笑いとばされてしまいかねない。

白詩は冬至だという。源氏は晩春で、まったく季節が違うが、にもかかわらず白詩は冬至のような陰鬱さに心が閉ざされていることを訴えるものである。

いわでものことながら、太陽への渴仰は昔の人ほど強い。その中でもっとも恐れられた短日が冬至で、もっとも聖なる祭祀とされたのが冬至の祭りであり、そのゆえにもっともグロウバルな祭祀が冬至のそれである。この詩にも、こうした短日を恐れさえしなければならぬ暗さがあつたらう。

そうした夜に、都を三千里も遠く離れて旅路にあり、独り病身を楊梅館に横たえている。詩の「若為」はナンズレゾの意に解すべきで、何のゆえあつて独り冷枕单床に宿るのか、という意味である。⁽⁵⁾

ここで「冷枕单床」というのが、もつとも大事であろう。日本の表現でいえば旅を修飾する「草枕」がこの内容とひとしい。「草枕」は妻の暖い「手枕」を欠くものとして、「手枕」の反対だからである。「まことに」として白詩を連想した中心点は、源氏が紫の上ほかの都の女たちと離別してきたところにあつたのである。

そしてさらに、この白詩の周辺を見ることによって、重ねられた世界の深さに気づくこととなる。

この詩を白楽天が作ったのは貞元十六年(八〇〇)二十九歳の時だが、この年の楽天を先学の研究を基として追ってみると、二月進士に及第した。第四位ではあっても十七人中の最年少であったから、自負の念も大きかったであろう。

ところが及第後、一旦洛陽に戻った後、暮春のころ旅に出、浮梁(江西省北部)に赴き、九月にはさらに符離(安徽省、宿州付近)にいて、外祖母の陳夫人の霊を祭った。十一月のことである。

こうした後半年のあり方を、堤留吉氏は「旅愁・郷愁・病愁の念しきりに起こり、ようやく人生をはかなみ、身を以て心を役する愚を免れ、天真に復帰したい、仏門に帰依したいなどの念に駆られる」と捉える。

また、この符離行では乱の後の流溝寺を通過したようで、次のような感懐を抱くに到っている。

乱後過流溝寺

九月徐州新戦後 悲風殺氣滿山河

唯有流溝山下寺 門前依白雲多

(文集卷十三)

また「遠行人」をひとしくする詩もある。

邯鄲冬至夜思家

邯鄲夜裏逢冬至 抱膝燈前影伴身

想得家中夜深坐 還應說著遠行人

(文集卷十三)

源氏が引用した「冬至宿楊梅館」はこうした諸詩に見られる感懐にとりまかれたもので、ひとりこの詩だけで存在するのではない。「三千里外遠行人」という思いも、右のような流離の想念を内容として発せられたことばであった。

源氏がほしかった流離感、右のような内容を知ることによって、十分に満足なものとなったであろう。

その上に、孤閨の嘆きも含まれるべきものであった。

そしてもう一つ、右を助長しようとした形跡もある。先立って源氏は、

唐国に名を残しける人よりも行く方しられぬ家ゐをやせむ。

(須磨)

と一首を口ずさむ。

これは屈原のことだとされる。だから源氏は屈原になぞらえうる要素も持つことになるが、屈原は節を枉げることなく山野に彷徨した忠臣である。その志操の高さを、源氏はおのれに課しつつ、より一層の不安を感じているのである。

まずは屈原を思い描かせ、ついで冬至の詩境を喚起せしめつつ、流離の悲しみを孤閨に集約して語る部分が、このくだりであった。

六 八月十五日夜禁中独直对月憶元九—須磨

光源氏が須磨に到着したのは暮春のころだったから、その半年足らずの後に、中秋の名月を須磨で仰ぐこととなる。それが一層流謫の情をかき立てた。

月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけり、
と思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふら
むかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられた
まふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめら
れず。

(須磨)

そこで、この「二千里外故人心」という口吟が白詩によるものであった。それほど長くない詩だから全篇掲げてみる。

八月十五日夜禁中独直对月憶元九

銀台金闕夕沈々 独宿相思在翰林

三五夜中新月色 二千里外故人心

渚宮東面煙波冷 浴殿西頭鐘漏深

猶恐清光不同見 江陵卑湿足秋陰

(文集卷十四、律詩)

源氏はこの第四句を「誦じたま」うたのだから、影響関係に疑念はない。

樂天が三十九歳の元和五年(八一〇)、親友の元稹が江陵に流され、元稹を名月の夜に憶って作ったのがこの詩である。元稹の答詩は次

のごとくである。

酬樂天八月十五日夜禁中独直玩月見寄

一年秋半月偏深 況就煙霄極賞心

金鳳台前波漾々 玉鉤簾下影沈々

宴移明妃清蘭路 歌待新詞促翰林

何意枚皋正承詔 瞥然慶念到江陰

(全唐詩卷四一二)

こうした元・白の贈答は元が流謫せられており、白は都に在るだから条件は今の源氏の場合と逆になるが、白樂天として流謫を重ねる生涯を送った人物であり、必ずしも条件を揃えて引用を控える、ということとはなかったであろう。

しかも、もっと大きく変えたのは源氏の場合「所どころながめたまふらむかし」という「所どころ」が多くて女性である点である。

中国における「交友」の概念が古代の日本では未成熟であることは、私も何度も述べてきた。むしろ性愛に偏る愛が多くての文学に語られるが、その点とひとしいものが今である。

しかしこのことを受容における変質と捉えてはいけない。源氏の作者は承知の上で元・白の関係を利用して、源氏と都の人間との強い結びつきを述べようとしたのだと、思われるからである。

その都の人とは、藤壺のことだ。右につづいてすぐに、

入道の宮の、「霧やへだつる」とのたまはせしほどいはむ方な
く恋しく、をりをりの事思ひ出でたまふに、よよと泣かれたま

ふ。

(須磨)

とあるのは、二年前に藤壺が、

ここのへに霧やへだつる雲の上の月をはるかに思ひやるかな

(賢木)

と歌をよこしたことを思い出したものである。

総じて藤壺と月とは密接に結びついている。この時も「月のなやかなる」夜の贈答であり、この後の冬、

月は限なきに、雪の光りあひたる庭のありさまも、昔の事思ひ
やらるるに、いとたへがたう思さるれど、

(賢木)

という月明の中で源氏は藤壺とことばを交す。

源氏物語の中に月は枚挙に遑なく登場する。林田孝和氏によると、

それには宴席の場、霊出現の場、男女の逢瀬と三つの場合があるらしいが、今の場合は第一のものであろう。それは二十六か所に及ぶ
というから、けっして少くない。

しかし、にもかかわらず藤壺における月を重大に考えなければならぬのは、須磨から帰って来た後、右と同じように、

冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なき
ものの、身にしみて、この世の外のことまで思ひ流され、おも
しろさもあはれさも残らぬをりなれ。

(朝顔)

という、例の雪まろばしをさせるくだりでも、なき藤壺が頭ち現わ
れてくるからである。

実は、このくだりにも「八月十五日……」という当面の詩の投影
を見る説もあるほど今と関係が深い。

この後、紫の上との話がつづき、

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。

(朝顔)

というなかで紫の上の「髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影に
ふとおぼえて」(朝顔)とある。もちろん藤壺を連想したのである。

これも単に血縁関係によつていうのではあるまい。この後で藤壺
の亡霊が源氏の夢枕に立つ。それほどに強いえにしがあつて、この
えにしをつなぎとめるものが、月だったのである。

だから右にあげた「この世の外のこと」とは、死せる藤壺思慕を
おいてはないだろう。

「須磨」の今問題としている個所も、そうした藤壺と月といった構
図の一つとして設定されていると見られ、この強固な意志の中に白
詩も変容せしめたと考えるべきである。

源氏は月を飽かず眺めて、

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはむ月の都ははるかなれど
も

(須磨)

と一首を歌う。こう都へ心が通うと、詩の「銀台金闕」また「輪
林」「浴殿」が都のものとして思い出されていただろう。読者は、
こうした光源氏の心の風景を、白詩から呼び起こすこととなる。

反対に「渚宮東面煙波冷」という江陵の情態はいま自分が身をお

いているところだから、海上につづく須磨の煙波が冷やかであろうという想像を讀者に起こさせる。

そしてまた、江陵が「卑湿足秋陰」という一句は、須磨における源氏の屈折した心理として読むことができるだろう。

いま源氏物語の作者は「二千里外故人心」という一句を挿入することによって、いわゆる「配所の月」を光源氏に見させることとなった。中国において、配流が日常茶飯に属するといつてよいくらい多いことは、誰しも認めるであろう。日本でも多少は受容して、「不遇」が詩題として選ばれることもあった（懐風藻の藤原宇合・石上乙麻呂など）し、和歌に応用して配流が主題となることもあった（万葉集の石上乙麻呂など）。「蜻蛉日記」ではわずかに一瞥しか与えなかった高官左遷の事件が、源氏物語ではこうして大構想の中に重大な主題として組入れられているのは、物語の大きな成熟であろう。源氏は、さらにその上に「配所の月」という文学的モチーフを加えたのだった。だからここでも菅原道真の故事に言及している。そうした流れの中で、しかし思慕が藤壺に極まるという源氏の大きな体質は抜きがたいのである。

白詩は、これほどに元九を慕い、同じ月を見ることに心の慰を求めながら、しかし「猶恐清光不同見」という。同じ恐れは光源氏にもあって、都の藤壺が月を共有しないかもしれない不安もあったことを、この詩の引用は示している。

七 八月十五日夜禁中独直对月憶元九—鈴虫

「八月十五日……」という詩は、もう一つ「鈴虫」の巻にも見える。いつてもここに白詩を認めない考えもあるのだが、⁽⁸⁾「鈴虫」の巻で、中秋の名月の夜、源氏は女三の宮のために鈴虫を鳴かせ、ついで訪れた人々とともに葉の音を奏でて月明をめぐる。

そのくだりはまず、

月さし出でていとほやかなるほどあはれなるに、空をうち

ながめて、世の中さまざまにつけてはかなく移り変わるありさま

も思いつづけられて、例よりもあはれなる音に掻き鳴らしたま

ふ。
(鈴虫)

と「三五夜中新月色」のあわれを語り、ついで源氏の述懐として、

月見る宵の、いつとももののあはれならぬをりはなき中に、

今宵の^{あな}新なる月の色には、げになほわが世の^{ほか}外までこそよろづ

思ひ流さるれ。
(鈴虫)

と告げられる。これも「新なる月の色」というところに白詩を見るもので、前者が「月さし出でて」という句に新月が想定されるような相当部分が多いが、それでもなお、白詩を踏まえたものか否か、判定は慎重を要する。

ただ「新なる月」を文字どおり新月とすると十五夜と合わないこととなり、今しも昇り始めた新鮮な月と解すると、当該詩の翻訳で

あろうと考える可能性が大きくなる。白詩をここに控えてみるのも一計であろう。

その上でいえば、「わが世の外まで」というのが「二千里外」に相当することとなる。これは、まずは、内容が別だと考えるべきであろう。白詩はどこまでも遠い場所というのであり、「この世の外」といえば、これは異界をさす。

そしてこの変容は、先の元稹が藤壺らと変わったのと同じ変化だが、源氏に先立って異界の概念は成立しているのだから、おそらく源氏の作者以前にあった異界の概念に、二千里をはめ込んだものと思われる。

この異界への連想は、前の節であげた「朝顔」の巻の藤壺思慕の部分も同じである。それほど強く、異界へと変化しているのだが、さてそれはどうしてこう変化するのだろうか。

すでに林田氏が月の一つの場合として死霊出現の時をあげることを見たが、この変化も月の霊性によるであろう。月見に先立って月への畏れがあることは世界的な現象であり、源氏物語はその尾を曳き⁽⁹⁾ずっている。その詳述の暇をもたないままに、林田氏にすぐれた考察のあることをいっておこう。

その紹介の中にはすでにあげた「朝顔」の藤壺の霊が出現するくだりもあるが、別に柏木が夕霧の夢の中に現われる月夜もある。

おそらく「故人」ということばが死者と受けとられることと同時に

であったろう、この、月が二千里外の人ではなく異界の人をよぶ一般の傾向に沿って、当面の「鈴虫」でも、死者がよび起こされる。その中のもっとも大きい一人が、故柏木であった。

故権大納言、何のをりをりにも、亡きにつけていとど偲^{しの}ばるること多く、公^{おほやけ}私^{わたくし}、ものをりをりふしのにほひ失せぬ心地こそすれ。
(鈴虫)

そこで考えてみれば、あの柏木を源氏が「にほひ失せぬ心地し」「いとど偲^{しの}ばるること」が多いというのである。のみならず、ここに「八月十五日……」という白詩の引用を認めるとすると、白楽天の元稹に対する如き友情を、ここに想定しなければならぬ。

柏木は、比喩的にいえば「渚宮」にあり、「煙波冷」であって、卑湿、秋陰の多い地にいるという。けっしてよい環境ではない。そして、同じ月を見ていてくれればよいと願い、見えないことで心を異にすることを恐れている、——そう源氏を読まなければならぬ。

これは一見奇異に思えるかもしれないけれども、引用を認めた時の必然の手續きである。

しかし、考えてみれば幽明境を異にするというのは肉体にすぎない。霊魂はへだたりなく往来し、永遠に生きつづける。

源氏物語にしても、生霊、死霊の行きかう世界であって、けっして生者と死者との間に、区別はない。

それは中国でも同じで、現に「漢皇」は方士を遣して楊貴妃の魂と対話させた。いや対話したという記憶をもち帰った、などというふたしかなことではなく、きちんと具体的な形見まで与えられている。

こうした世界にあって、生者か死者かの区別を二千里の外に立てることは、さして意味がなかったといえるだろう。「故人」はあくまでも古い関係の人間であった。

しかし、それにしても源氏と柏木が白楽天と元稹でありえるのか。くり返すが、ここへの白詩の引用は、そのあり方を促してやまない。そして、こうした人間関係を作り上げるのが月光の靈性にあると、源氏は訴えつづける。

われわれはこれらの要求に、今素直に従うべきであろう。引用を認める以上、論理的に拒否する方法がないのだから。

このことを逆にいおう。源氏物語の作者は、あえて二つの反対を押し切って白詩を引用した。二千里外が異界であり、当然「故人」は死者になることが一つ、もう一つは柏木を殺したとさえいえる源氏だのに、これを白・元の関係に擬したことが一つ、である。

しかし、このあえての引用によって出来上がった源氏物語なる世界は、空間の次元を無限定なものとし、人間の愛憎を霊において越える仕組みを、読者に喚起することとなった。

この両者に共通するものは無礙ということであろう。その無礙の

主張を月光が支えているのだから、われわれは月光をあびながら、無礙を仰ぎ見るしかない。

大きな主張が、源氏物語にあったと思われる。

注

- (1) 古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』八ページ、丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』一〇六ページに指摘が見える。ただし後者は「類似」とする。
- (2) 田中克己『白楽天』八ページ。
- (3) 注1の古沢氏八ページ、丸山氏一〇六ページ、日本古典文学全集本四卷三四二ページなど。
- (4) 以上「藤裏葉」と慈恩寺の詩との関係はすでに言及したことがある。拙稿「和歌的表現と漢詩」『日本文学講座』（大修館）第九巻所収、一九八八年九月。
- (5) 「若シ独り楊梅館ニ宿ルコトヲ為ストモ、冷枕単床一病身ナラム」という訓読が見られるが、意味をなさない。
- (6) 堤留吉『白楽天研究』三四・三五ページ、花房英樹『白楽天研究』九二・九三ページ。
- (7) 林田孝和『王朝びとの精神史』一三一ページ以下。
- (8) 水野平次『白楽天と日本文学』。
- (9) 注7の前掲書一三六ページ以下。

なお、文中に引用した本文は、次のものによる（ただし、白氏文集は他本を参照した箇所がある）。

- (一) 『源氏物語』 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳 『源氏物語』
（日本古典文学全集）小学館 一九七〇年—一九七六年。
- (二) 「山城」「東屋」 小西甚一校注 『古代歌謡集』（日本古典文学大
系）岩波書店 一九五七年。
- (三) 『白氏文集』 『白氏長慶集 上下』（長沢規矩也編『和刻本漢詩
集成』）汲古書院 一九七四年。
- (四) 『元氏長慶集』 『全唐詩』 世界書局中華民国六四年。